米沢藩北条郷における安政二年の種痘実施

――『諸事記録』より――

船山道隆

日本に本格的に牛痘法が導入されてから数年後の安政二年（一八八五年）、米沢藩において組織的な種痘が実施された。今回、この種痘の当時の記録である『諸事記録』を発見したのでその概要を報告する。

『諸事記録』は安政二年の種痘のうち北条郷（現南陽市のほとんどと上山市、高畠町の一部）で行われた種痘についての文書をまとめたもので、山形県南陽市宮内で宿場医を営んでいた船山家に保存されている。

これには

㈠ 藩主の命令で種痘を実施するために藩医、町医師を種痘懸に命じた旨を通知する文書、

㈡ 実際の施術者である町医師、宿場医に宛てた命令書、

㈢ 藩の医学校好生堂から施術者に宛てた実施に当たっての注意事項、

㈣ 北条郷の種痘懸に任命された医師たちから任命されなかった北条郷の医師たちへの種痘禁止を申し述べた文書、

㈤ 代官所から村の肝煎に宛てて出された種痘を受けるように促す文書、

㈥ 種痘懸から種痘実施に当たっての役所に対する上申書、

㈦ 村毎の種痘人数を記したもの、

㈧ 安政二年と同様に安政三年、四年にも種痘を行ったがこのことに関する文書、

㈨ 安政二年の種痘に関し実施に当たった医師たちを表彰してほしいと上申した村々からの文書、

等の種痘に関する文書の写しが記してある。

この記録によると、藩医をはじめとする多くの医師が何らかの形で種痘に動員され、実際の種痘は町医師、宿場医により実施された。安政三年三月に安政二年分の種痘は一

応終了し、全人口の約一〇%に種痘を行った。

また、安政四年以降の種痘の組織的な実施については同地方については依然不明である。

（東北大学医学部附属病院）

江戸時代（末期）の白内障手術症例報告

――『白内翳手術人名実験録』から――

奥沢康正

古来、白内障の治療には様々な試みがなされてきたが、最も効果的な治療法は、手術による方法である。我国最古の医学書、医心方には、第五巻に治目清盲方第十四に、『眼論』から引用した金錍（錍は斧の意）による手術法が、「清盲（白内障）は金錫を用いて一針すれば、豁然として雲開き日を見るごとし」と記載されている。さらに『病源候論』の引用には、清盲の症状を述べた上で、「世間の愚医、庸医は病理を知らず、いたずらに煎剤、散薬、膏薬を用いて虚談、盲説を説くがその効果はない」と現状を愁い、清盲に針を施すことの重要さを説いている。

実際に、我国でも古くから針療法が行われたことは、平安末期に描かれた『病之草子』に「針治療をする目医師の